



20th CENTURY

20世紀の文学

世界文学全集

12

ショーロホフ

開かれた処女地

1

集英社

昭和四十年十二月二十八日 印刷
昭和四十一年一月二十八日 発行

訳者 原 久一郎・原 卓也

発行者 陶山 巖

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 文勇堂製本工業株式会社

本文用紙 日本パルプ工業株式会社

表紙 東洋クロス株式会社

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話(265)六一一一(代表)

振替 東京一五六五三

定価 五二〇円 (落丁・乱丁は本社で
お取りかえます)



目次

開かれた処女地

原久一郎・原卓也訳

三

第一部

五

第二部

三六

開
か
れ
た
処
女
地

1

第一部

第一章

一月の末ともなると、はじめて訪れた雪どけ日和の風に乘って、桜の園がころよい香りを漂わせる。太陽が暖かい光を送ってくれさえすれば、真昼どき、どこか風の吹きつけぬ場所では、かすかに感じとれるうら淋しい桜の樹皮の匂いが、とけた雪の淡い湿気と入りまじり、雪の下や、朽ち葉のかげから顔をのぞかせた大地の、昔ながらの力強い匂いに入りまじって漂う。

色とりどりともいうべき、さまざまの匂いを秘めたほのかな香りは、青い宵闇のおりるまで、去りもやらず、園の上に立ちこめる。やがて、葉の一枚もない枝々の向こうに、うす緑の衣裳をまとった月の鎌がさしのぞき、餌をあさる兎が雪の上に点々と足跡を印してゆく……

と、そのうちに、風が曠野の丘の頂^{いたさ}から、霜にやかれた

よもぎの、かすかな匂いを園に持ち運び、日中の香りや物音は消えて行く。そして、よもぎや、ブライアン草や、刈り入れ後の畑に色あせ萎^{しお}れている雑草や、うねうねと丘のように起伏する耕地などの上を通過^{フレイツツア}して、灰色の狼よろしく、しのびやかに、夜が東からやってくる——背後の曠野に、たそがれのかげを足跡のように残しながら。

一九三〇年一月のある晩、曠野に近い^{ひら}小路を通過^{トウ}して、騎馬の男が、グレミヤーチイ・ローク部落にやってきた。この男は、小川のほとりで、足のつけ根に汗が巻き毛よろしく真っ白に凍りついている、疲れきった馬をとめると、鞍をおりた。狭い小路の両側にうちつづく桜の園の闇の上や、島のように点在するポプラの林の上に、細い月が高くかかっていた。小道は暗く、静かだった。川向こうのどこかで、犬が騒がしく吠え、灯りがポツンとただ一つ、黄色い光を投げていた。男は、ひんやりとする空気を貪るように鼻から吸いこむと、ゆっくり手袋をぬいで、煙草に火をつけた。やがて馬の肚帯^{はらおび}をしめ直し、鞍褥^{あんじょ}の下に指をさしいれて、じっとりと汗ばんだ馬の背の、熱っぽい濡れた肌を感ずると、また自分の大きなからだを軽々と鞍にのせ、冬にも凍ることのない浅い小川を渡りはじめた。馬は川底に敷きつめてある小石にうつろな蹄鉄の音を響かせて進み、歩きながら水を飲むうと首をのびしかけたが、乗り手にせきたてられ、脾腹^{ひはら}をふるわせて、なだらかな対岸の斜面に駆けあがった。

こちらへやってくる櫓の滑り木の軋みと人声とを聞きつけて、男はまた馬をとめた。馬は物音のするほうへ用心深げに耳をそばだて、首をめぐらした。銀光りのする鞍と、同じく銀金具の施されたコサック鞍の高い鞍杵とが、月の光を浴びて、小路の暗闇に思いがけなくきらりと白い光を放った。男は手綱を鞍杵に投げかけると、それまで肩にかけていたラクダの防寒頭巾をそそくさとかぶって、すっぱりと顔をくろみ、大股のトロットで馬を走らせた。荷櫓のわきを駆けぬけると、前のように並み足で馬を進めたが、頭巾はとらなかつた。

男は部落に入ってから、通りすがりの女にたずねた。

「おい、ちょっと、おかみさん、ヤコフ・オストローヴノフの家はどこかね？」

「ヤコフ・ルキーチのことかね？」

「ああ、そうだよ」

「だったら、あのポプラの向こうの家ですよ、瓦屋根の見えるでしょ」

「ああわかった。ありがとう」

だだっぴろい瓦屋根の百姓家のそばで馬をおりると、男は木戸から馬を引き入れ、鞭の柄でそっと窓を叩いて、声をかけた。

「こんばんは！ ヤコフ・ルキーチ、ちょっと顔を貸してくれよ」

上衣を羽織っただけの姿で、帽子もかぶらず、主人が表階段の上へ出てきた。彼は客の姿に目をこらしながら、階段をおりた。

「だれだい、いま時分？」半白の口髭に微笑を浮かべながら、彼はたずねた。

「わからんかね、ルキーチ？ とにかく泊めてもらうよ。それから、馬を暖かいところへ入れてやりたいんだが」

「いやどうも、同志、ぜんぜん見当がつきませんぜ。あなた、地区執行委員会の人と違いますか？ でなきゃ、農業部の人じゃねえかな？ はてな、何か憶えがあるぞ……あんたの声を、どこかで聞いたことがあるように思うんだが……」

客はきれいに剃刀をあてた口もとを微笑に歪めながら、防寒頭巾を左右に開いた。

「ポロフツェフだよ、おぼえてるか？」

と、ヤコフ・ルキーチは不意に怯えて、あたりをうかがい、顔色をなくしてささやいた。

「ああ、大尉殿でしたか……どこから、また？……大尉殿！……馬の世話は、いますぐしますから……厩へ入れますよ……まったく何年ぶりですか……」

「おい、おい、もうちょっと静かに頼むぜ！ ほんとにしばらくだったな……おまえ、馬衣を持ってるか？ それから、この家には、よその者はだれもないだろうな？」

客は手綱を主人にわたした。馬は、見ず知らずの人の手の

動きにもの倦げにしたがい、頸をのばして高々と頭をもたげ、後足を大儀そうにひきずりながら、厩に向かった。そして板張りの床を蹄でコツコツと叩き、ほかの馬の住んでいた匂いを嗅ぎ分けて、鼻風をふいた。見ず知らずの人の手が馬の鼻面におかれ、その指が、味も素っ気もない轡の鉄具を、擦りむけた歯ぐきから注意深く器用にはずしてくれたので、馬はさも感謝するように、乾草のほうに頭を垂れた。

「肚帯はゆるめてやりましたけど、鞍はもうしばらくつけときましょう、ちょっと汗が引いたころあいをみて、はずしてやりませう」主人は冷たくなった馬衣をまめまめしく馬にかけてやりながら、いったが、こう言いながらも、彼は鞍にちょっと手をふれてみて、鞍褥の下にとおしてある肚帯がきつくしめてあり、鍔革を結ぶ皮紐がゆるめられるだけゆるめであるところから推して、客人がずっと遠方からやってきたものだということ、今日一日のうちにかなりの道を走りとおしてきたのだということを、いち早く読みとっていた。

「おまえのどこにや、麦はたっぷりあるかい、ヤコフ・ルキイチ？」

「ええ、まあいくらかはあります。水を飲ませたら、麦をやりましょう。じゃ、家に入りましょうや、まったくいまになつてみると、あなたをなんとお呼びしたらいいか、わかりませんわい……昔ふうの呼び方は、どうも癖がぬけちゃったもんで、なんとなくば、つが悪いし……」闇の中では自分の微

笑が相手に見えぬとは知りながら、主人はぎこちなく笑った。「名前と父称でちゃんと呼んでくれよ。忘れたわけでもないだろう？」客は、先に立って厩を出ながら答えた。

「どういたしまして！ これでもドイツ戦争のときにや、苦勞をともしたもんだし、こんどの戦争でもそうだったじゃねえですか……あたしや、あなたのことをちょいちょい思いだしてたもんですよ、アレクサンドル・アニーシモウイチ。ノヴォロシースクでお別れしてからこのかた、あなたの噂はさっぱり耳にしませんでしたからねえ。あたしや、また、あなたがコサックたちといっしょにトルコへ渡ったんだろうとばかり思ってたんでさあ」

二人は、熱いほど焚きこめられた台所へ入った。遠来の客は防寒頭巾と、真っ白な羊皮の帽子をとり、白っぽいまばらな髪におおわれた、逞しげな角ばった頭をあらわした。狼のように鋭い、禿げあがった額のかげから、すばやく室内に視線を走らせると、彼は深い眼窩の奥で気づまりな光に輝いている薄青い眼を、微笑みがちに細くして、腰掛けにすわっていた主婦と嫁とに会釈した。

「お達者で何よりですな、おかみさん！」

「はあ、おかげさまで！」主婦は言葉すくなく答えると、うながすように夫を見やり、眼にものをいわせてたずねた。「あなたのお客さんは、いったいどういう人だい？ どういうあしらいをしとけばいいのさ？」

「晩飯の支度をしな」主人は、客を居間の食卓に招じて、手短に言いつけた。

客は豚のシチューを食べながら、女たちもまじえて、天候のことや、戦友たちの噂話などをした。まるで石から彫りあげたような彼の大きな下顎は、動くのが大儀そうだった。彼は、さながら死にかかって寝たきりの牛のごとく、もの倦げに口を動かして、ゆっくりと食べるのだった。食事がすむと、立ちあがって、埃まみれの造花に飾られた聖像に祈りを捧げ、肩のあたりの窮屈な古ばけたトルストーフカ（トルストフの愛用した型のルバーシカ）からパン屑を払い落として、いった。

「いや、どうもご馳走さん、ヤコフ・ルキーチ！　ところで、ちよっと話があるんだが」

嫁と主婦とは、そそくさと食卓を片づけ、主人の肩の動きを呑みこんで台所に立ち去った。

第二章

やや近眼で、動作の鈍い党地区委員会の書記は、テーブルの前に腰をおろし、ちらとダヴィドフに横目を走らせると、眼の下に袋のような皺をあらわしながら、眼を細くして、ダヴィドフの身分証明書を読みはじめた。

窓外の電線に風がうなっていた。糊網はつなで柵につながれた馬の背の、ちやうど背骨の上を、一羽の鵲かきすずがいまにも落ちそ

うな格好でよちよちと歩きまわり、何かを啄つばんでいた。風がその尾を折らんばかりにはげしく吹きつけ、宙に舞いあげたが、鵲はまた、いかにも年寄りくさく疲労の色を浮かべあらゆることに興味がないというようなようすをした瘦せ馬の背におりてきて、残忍そうな眼を勝ち誇ったようにあたりを走らせた。村の上空には、こまかいちぎれ雲が低く走っていた。ときたま、雲の切れ目から陽光が斜めにさして、夏のように青い空の一端がのぞくことがあった。そんなときには、窓外に望まれるドン河の彎曲部や、その向こうの林、さらにはまた、豆粒ほどの風車小舎を地平線のあたりに見せているはるか遠くの山々などが、思わずハッと目を見張るようなスケッチ絵の柔らかな色調を帯びるのだった。

「すると、つまり、きみは病氣のためにロストフでひまどってたつてわけだね？　まあいいだろう……あとの八人の農村オルグ（一九二九年十一月に催された全国共産党中央委員会の総会決議によつて、ゴルホーイズや機械トラクター配給所に派遣されたモスクワ、レニングラードその他の諸都市の二万五千名の労働者）は三日前にやってきたよ。集会があつてね。各ゴルホーイズの代表が歓迎の意を表したんだ」書記は考えこむように唇をかんだ。「ここはいま特に事情が複雑なんだよ。地区の集団化の割合は、十四・八パーセントさ。大部分は共同耕作組合だ（メ）がね。富農階級はまだお尻に穀物徴発の名残りをひきずって歩いている始末だからね。人手がいるんだ。それもちよっとやそつとのことじゃなくね！　ゴルホーイズじゃ、労働者を四十三人よこしてくれと申請してやったの

に、派遣されてきたのは、きみたち九人だけだものな」こういうと、書記は、いったいこの男は何に使えるだろうと品定めでもするかのように、腫れぼったい眼瞼の奥から、これまで見られなかった一種独特の、探るような眼差しで、ダヴィドフの瞳を長いこと見つめた。

「すると、同志、きみはつまり金属工だったんだね！　それについてはすてきだ！　それで、プチロフ工場にはもうだいぶながいの？　まあ、一服やりたまえ」

「復員以来ですからね。九年ですよ」ダヴィドフは煙草に手を伸ばした。と、書記は、ダヴィドフの手首のかすかに青い刺青をいち早く眼にとめて、たるんだ唇の端に薄笑いを浮かべた。

「お洒落と誇り兼用かい？　海軍にいたんだね？」

「ええ」

「そうだろうな、その錨を見りゃわかるよ……」

「なにしろ、若かったもんでね……思慮分別の定まらぬ若気の過ちといったわけで、ついこんなばかな真似をしましたよ……」ダヴィドフは、《ちえ、よけいなところに目ざとい野郎だ！　そのくせ、穀物徴発なんかは、もうちっとで見落とすところだったくせに！》と心のうちに思いつながら、腹立たしげに袖を引きおろした。

書記はちよっと口をつぐみ、突如、病的にむくんだその顔から、なんの意味もない愛想笑いを消した。

「じゃね、同志、きみは地区委員会の全権委員として、今日のうちにでも、全面的集団化を遂行しに行ってくれたまえ。地区委員会の最近の指令は読んだろ？　知ってるね？　それとど、きみにはグレミヤーチイ部落のソヴェートに行ってもらうんだ。休息はあととれるよ、いまはその暇がないんだ。頑張らなくちゃ。百パーセント集団化をめざしてね。あそこだ、だつてちやちやな農業組合（ズの前身）があるにはあるんだが、われわれは巨大なコルホーズを作らなくちゃならないんだよ。宣伝隊を組織したら、すぐきみたちのところへも派遣する。しかし、まあ当分は、せいぜいほうぼうをまわって、富農階級を慎重に圧しつけていくことをもとに、コルホーズを作っていくんだな。貧農や中農は残らずコルホーズに入るようにならなきゃ駄目だぜ。そうしとけば、もう、コルホーズの播種面積全体にいきわたるだけの、共有の種子のストックだつて作れるんだからね。向こうへ行ったら、十分こころして行動してくれたまえ。中農ってやつは始末におえんからね！　グレミヤーチイには、コムニスト三名からなる党細胞があるんだ。細胞の書記と村ソヴェートの議長は好い人間だよ、以前には赤軍のバルチザンだった連中だね」こういうと、彼は唇を噛んで、補足した。「だから、いいにつけ、悪いにつけ、そのときの名残を残らず身につけてるのさ。わかるだろ？　政治的に教育不足の連中は、えてして失敗をやりかねないもんだからね。万一、面倒なことでも持ちあがったら、地区へ

駆けつけてくれよ。いや、電話の連絡はまだできてない、これが頭痛の種なんだよ！ そうそう、まだあつたつけ、細胞の書記はあの部落での赤旗勳章拝受者なんだが、どうもすこし過激でね、全身これ角^{かど}って感じだぜ……それみなみたいていの角^{かど}じゃなくてさ」

書記は書類鞆の錠を指で弾いていたが、ダヴィドフが腰をあげるのを見ると、いきいきした語調でいった。

「ちょっと待ってくれよ、まだ話があるんだ。毎日騎馬伝令で報告を送って、あっちの連中に気合いを入れてくれたまえ。じゃ、すぐにうちの組織部長のところへ顔をだして、出発してくれ。きみを地区執行委員会の馬で送るように、ぼくからいっところ。じゃあ、集団化が百パーセントに達するまで、せいぜい頑張ってくれたまえ。そのパーセンテージによってきみの仕事の評価もするんだからね。われわれは十八の村ソヴェートから一大コルホーズを作るつもりなんだ。どうだい？ さしずめ農業のクラスノ・プチロフ（^{フレニングラード}の大鉄工場）というところさ」そして書記は、われながら気に入ったこの比喻に、会心の笑みをもらした。

「あなたはさっき、富農の扱いを慎重にしろということ、ぼくに何か言いましたね。あれはどう解釈すればいいんです？」ダヴィドフはたずねた。

「つまり、こういうことさ」書記は鷹揚^{たうやう}に顔をほころばせ、「穀物徴収の割り当てをちゃんと納める富農もいるけど、金^{こえ}

輪^{りん}際^{さい}納^なめな^めないようなやつもいるんだ。後者のような手合いに對しては、問題は簡單明瞭^{めいりょう}さ。第一百七條^{（富農が余剰穀物を定価で沒收し得ることを定めてある）}を適用すりゃ、ケリがつくからね。ところが、前者となると、いささか厄介だ。早い話、たとえばきみだったらこういう連中をどう扱うね？」

ダヴィドフはちよつと考へて答えた……

「ぼくだったら、新しい割り当てをだしますね」

「ほら、どうだ！ だめさ、同志^{どうし}、そりゃまずいよ。そんなことをすりゃ、われわれの政策に対する信頼を根こそぎなくしかねないぜ。そんなことをした日にゃ、中農がいったいなんていうと思う？ こういうにきまつてるよ。《ふん、ソヴェート政權なんてこんなものさ！ 百姓を好きなように引っ張りまわしやがって！》レーニンだって、農民の気持ちを真剣に読み取らなければいけないって教えてるはずだぜ、それなのにきみときたら《新しい割り当て》をだすなんていうんだからな。そんなのは幼稚だよ、きみ」

「幼稚？」ダヴィドフは顔色を変えた。「じゃ、どうやらスターリンは……そのウ、あなたにいわせると間違っているらしいですね、え？」

「この場合、スターリンになんの関係があるんだね？」

「ぼくはマルクシストの會議でやったあの人の演説を読んだんですよ、あれはなんていう會議だったかな……ほら、農村問題を扱った會議ですよ……ああ、農民家會議だったかな！」

「農学者会議だろ？」

「それそれ？」

「それがどうしたんだい！」

「あの演説ののっている『ブラーヴダ』を持ってこさせてく
れませんか（一九二九年十二月二十七日のマルクシスト・農学者会議で行な
れたスターリンの演説『ソ同盟における農業政策の諸問題に
よせて』は同月二十九日の）」

事務主任が『ブラーヴダ』を持ってきた。ダヴィドフは貪
るように走り読みした。

書記は待ち受けるような笑みをたたえながら、彼の顔を見
つめていた。

「同志スターリンがいったいなんといっていると思います？
うん、ここだ。これはどうなんです？……『われわれが局限
的見地に立っているあいだは、富農清算を許容することはで
きなかった……』いや、もうすこし先だな……そう、ここ
だ。『ところが現在はどうであらうか？ 現在では問題が異
なる。いまやわれわれは、富農に対して決定的な攻撃を加
え、その抵抗を打破し、階級としての富農を清算すべき可能
性を有しているのだ……』階級としての、ですよ、いいです
か？ だったら、なぜ穀物の第二次割り当てをしちゃいけない
んです？ 富農を完膚なきまでもみつぶすのが、なぜい
けないんです？」

書記は顔の微笑を消し、ややまじめな面持ちになった。

「もうすこし先を読めば書いてあるはずだぜ、富農清算を行

なうのはコルホーズに入る貧農・中農の大衆である、とね。
そうじゃないかい？ 読んでみたまえ」

「あなたって人はまったく！」

「何がまったくだ！」書記は色をなした。声までふるえた。

「じゃ、きみの提案していることはいったいなんだね？ ど
の富農に対しても無差別に杓子定規な物差しをあてようとし
ているんだぜ。それもこの地区でさ。この地区じゃね、集団
化がたった十四パーセントしか行なわれていないんだし、中
農はこのごろになってようやくコルホーズに入ろうという気
持ちを見せてきたばかりなんだよ。そんなことをしちまった
ら、たちまちもとの木阿弥（もくあみ）になりかねないよ。まったくこ
ういう連中が、地方の事情もわきまえずにのりこんでくるんだ
からな……」書記は言葉を控え、今度はいくらかもの静かな
声音でつづけた。「そんな考えでいたら、いくらでも望みど
おりに打ち毀（くだ）しができるっていう寸法だよ」

「それは、つまりですわね……」

「まあ、おちつきたまえ！ もし、そういう手段が必要であ
り、また時宜に適したものであるとすれば、地区委員会が直
接われわれに指令をくだすはずだ、『富農を根絶せよ……』
とね。そのときこそ、どうぞさ！ なに、わけはないよ。民
警だの、そのほかあらゆる機関がきみに手を貸すからね……
しかし、いまのところわれわれとしては、人民裁判をととし
て一つ一つ片づけて行くほかないんだ、つまり穀物を隠匿し

た富農を第百七条によって経済的に制裁するのさ」

「じゃなんですか、あなたの考えでは、小作農や貧農や中農は富農清算に反対だっていうわけですか？ 富農の味方なんですか？ そういう連中を導いて富農に立ち向かわせることこそ、必要なんじゃないませんか？」

書記は書類鞆の錠をピシヤリとおろして、にべもなくいった。

「指導者の一言一句を自分なりに解釈するのはきみの勝手だけれどね、地区の責任を負っているのは地区委員会書記局であり、個人的にはぼくなんだからね。まあきみは、われわれの派遣するところへ行つて、きみの編みだした方針ではなく、われわれの方針を遂行するように努めてくれたまえ。ところで、たいへん失礼だけど、ぼくはきみと議論を戦わせている暇がないんでね。ぼくにはこれ以外にもいろいろ仕事があるもんだから」こういって彼は立ちあがった。

ダヴィドフの頬にかつとまた血がのぼった。が、彼はかろうじて自己を制していった。

「ぼくは党の方針を遂行しますよ。それからね、同志、ぼくは労働者流儀で腹藏なくいうんだけど、あなたの方針は間違ってます、政治的に正しくありませんよ、実際！」

「ぼくは自分の仕事の責任はとるよ……しかしね、その《労働者流儀》ってやつは、もう時代遅れだよ、そう……」

電話が鳴った。書記が受話器をとった。いろいろな人が部

屋に入ってきたのはじめてなので、ダヴィドフは組織部長のところへ行った。

《あいつはすこし反動だな……たしかにそうだ！》地区委員会を出ながら、彼はこう思った。《同志スターリンが農学者に対して行なった演説をもう一度読んでみよう。よもやおれが間違っていることもあるまい？ いや、どういたしましてだ！ あなたが富農をつけあがらしちまったのも、その寛大さのせいなんだぜ。州委員会じゃまだ《やり手》だなんていってたけど、なにがして、富農たちはどっさり穀物を隠匿してるじゃないか。おさえつけるってことと、有害分子として根絶やしにするってことは、ちょっとばかりわけが違うんだぜ。どうして大衆を指導して行かないんだい？》心の中で議論をつづけながら、彼は書記に立ち向かっていた。毎度のことながら、もっとも相手を納得せしむべき論拠はあとになって浮かんでくるのだった。あの地区委員会の部屋では、興奮し、いきりたったあまり、思いつくままの反駁を行なったのだ。もっと冷静になる必要があるようだ。彼は凍りついた水溜りをピチピチと踏みつけ、市の立つ広場では凍った牛糞につまずいたりしながら、歩いて行った。

「あんなに早く話を打ち切っちゃって残念だったな。でなきゃ、ぎゅっといわせてやっただが」ダヴィドフは声にだしてつぶやいたが、通りかかった女がすれちがいがながら薄笑いを浮かべたのに気づいて、腹立たしげに口をつぐんだ。

ダヴィドフは《コサツクと農民の家》に立ち寄り、トラUNKを取ってきたが、シャツの着替え二枚と靴下と服とをのぞけば、おもな荷物といったところで、ネジまわしや、ヤットコ、粗目（あらめ）のヤスリ、金尺、コンパス、ペンチ、止めネジ、そのほかレニングラードから持ってきた自分自身の持ち物であるガラクタ道具ぐらゐであるのを思いだして、苦笑した。《ばかばかしい、こんなものを使うせきがあるかい！ ひょっとしたら、トラクターの修繕くらいせにやらんかと思ってたけど、ここにはトラクターなんて、気の利いたものはないや！ きっと、地区の全権委員として、地区中とびまわることになるんだろう。こんなものはだれかホルホーズ員の鍛冶屋にでもくれちまおう。惜しくもねえや》彼はトランクを櫓（う）に投げこみながら、こう思い決めた。

じゅうぶん餌を飼われた馬は、座席の背の色とりどりにけぼけぼしく塗り立てたタウリーダ櫓（う）を、軽やかに運んだ。村を出るか出ないうち、ダヴィドフは寒さに凍えた。彼はすり切れた外套の毛皮襟（えり）にきっちり顔をくるみ、鳥打ち帽子を深々とかぶった。風と、湿気（あせ）を帯びたみぞれとが、襟のあいだや袖口に吹きこみ、震えあがるほどの寒さだった。古ぼけた軽い短靴をはいている足が、ひときわ冷たかった。

村からグレミヤーチイ・ロークまでは、人気がない丘づたいに二十八キロある。氷のとけかかった馬糞のためにどす黒く汚れた道が、丘の頂を走っている。あたりは、見わたすか

ぎり、雪の処女地だ。道の両側のよもぎや、あざみの頭が、雪をかぶってしまっているのも痛々しい。ただ、谷の斜面にだけ、大地が赭（あか）い地肌をあらわして、大きな眼で世界を眺めていた。ここには、風にあおられて雪がつもらなかったのだ。そのかわり、谷や山峡の底は、びっしりと吹きだまった雪が上のほうまでつもっている。

ダヴィドフは足を暖めようと思い、櫓の腕木につかまっで、ながいこと走ってみたが、やがて櫓にとび乗ると、身をちぢめて、まどろみはじめた。櫓の滑り木の刃が軋み、馬の蹄鉄の尖金（さきかね）がさくさくと乾いた音をたてて雪にくいこみ、右の轅（うで）の横木（よこぎ）ががちゃがちゃと鳴った。ときおりダヴィドフは真っ白に睫毛（まつげ）の凍った眼瞼（がん）を開けて、矢のように街道から舞いあがる鳥の翼が、陽光を浴びて紫色の稲妻（いなづま）さながらに閃くさまを眺めたが、ころよい睡気がまたしても彼の眼を閉じ合わせるのだった。

彼は、胸をしめつけるような寒さのために眼をさました。眼を開くと、虹の七色にきらめく涙をとおして、寒々とした太陽や、ひっそりと静まりかえった曠野の荘重なほど広漠たる眺めや、地平の涯（は）の鉛（鉛）のような灰色の空が望まれた。さらにまた、ほど遠からぬ塚の、真っ白な頂に、赭黄色の毛並みを燃え立つばかりに輝かせた狐のいるのが、目に入った。狐は野鼠を探してせせと雪を掘っていた。ときおり後肢で立ちあがっては、身をくねらして躍り跳ね、今度は前肢に力を

入れて、きらきらと燦^{きらめ}銀色の雪煙につつまれながら、掘り立てると、尻尾がしなやかに軽やかに滑って、真っ赤な炎の舌のように雪の上に垂れるのだった。

日暮れ前にはグレイ・ロークについた。部落ソヴェートの広い中庭には、二頭立ての空轡^{から}が人待ち顔にとまっていた。表階段のわきに、七人ばかりのコサックが、煙草をくゆらしながら、たむろしていた。汗が凍って毛並みの荒れた馬は、表階段の横に歩みをとめた。

「こんばんは、みなさん！ この厩はどこですか？」

「あ、こんばんは」中年のコサックが、兎の毛皮帽の縁に片手をあげながら、みなにかわって答えた。「厩なら、あんた、あの葦葺^{わらぶき}屋根がそうですね」

「そこへ曳^ひいてつてくれ」ダヴィドフは駟者に言いつけて、轡からとびおりた。ずんぐりとした、遅いからだつきだった。手袋で頬を拭いながら、彼は轡のあとについて行った。コサックたちも厩に向かった。いかにも大ロシア人くさくさ「ガ」行の音をどぎつく発音するこの遠来の男が、見たところ役人らしいのに、ソヴェートへ入らないで、轡のあとについて行く理由が呑みこめなかったのである。

厩の戸口からは、馬糞の湯気がほかほかと渦巻いて流れでていた。駟者が馬をとめた。ダヴィドフは馴れた手つきで、引き綱から横木をはずしにかかった。まわりに集まっていたコサックたちは互いに顔を見合わせた。女ものの白い毛皮外

套を着た老人が、口髭の氷をこすり落としながら、悪戯^{いたづら}っぽく眼を細めた。

「氣いつけれや、あんた、けるからな！」

尾のつけ根の下から尻帯をはずしてやっていたダヴィドフは、老人のほうをふり返り、くろずんだ唇で微笑した。笑うはずみに、前歯の一本かけているのが見えた。

「ぼくはね、おじいさん、機関銃兵だったんだよ、ぼくの乗りまわしてた馬はこれどころじゃなかったぜ」

「じゃ、歯が一本欠けているのは、牝馬にでも折られたんじゃないのかい？」鼻孔のあたりまでち切れ毛の髭をもつさりとのばした、烏のように色の黒いコサックがたずねた。

コサックたちは他意もなく笑いだした。ダヴィドフは、てきばきと馬の頸^{くび}をはずしながら、軽口をたたいた。

「いやあ、歯の欠けたのはずっと以前の話さ、酔ったあげくにね。でも、このほうがいいんだよ。女たちがこわがらないもの、あれならまさか取っても食うまいってね。なあ、おじいさん？」

この軽口はうけた。老人はことさら嘆かわしげなようすをして首をふった。

ダヴィドフはコサックたちに煙草をふるまい、自分も一本吸いつけて、ソヴェートに向かった。

「あそこに議長がいるんできあ、わしらの党の書記もあそこにありますよ」ダヴィドフのあとにしつこくついてまわりなが